

2+1 トラベローグ： 帝国日本からの記憶

Mitsuyo Wada-Marciano
Carleton University / Kyoto University
mwadamar@gmail.com

二人の「文化人」

- 文化新聞『土曜日』(1936-37, 1947, 1959-63)の編集者・能勢克男(1894-1979)
- 日本画家・橋本関雪(1883-1945)

- 紀行映画 = <場/locale>
 - 資本主義の普遍化というグローバルな力学
 - 文化主体者たちの体感 (input) あるいは彼等の文化的な実践 (output) といったヴァナキュラーな力学
- 『Nippon Modern: Japanese Cinema of the 1920s and 1930s』 (2008)

グローバルな力学

- 小型映画というメディア技術の波及現象
- 近代空間の具現とも言える「柵のない」動物園

ヴァナキュラーな力学

- 和辻哲郎の『風土：人間的考察』（1935） -- 「共同体」あるいは「間柄」というコンセプト
- 橋本関雪と朝鮮の風景あるいは朝鮮人との「間柄」

『生まれてはみたけれど』(1932)



『生まれてはみたけれど』(1932)

- <http://www.youtube.com/watch?v=IDy4RsxDuy4>
- 0:57:01 – 1:02:17 (5 min.)

橋本関雪のヨーロッパ旅行

- 1927年4月から翌年28年1月
- 北欧を旅行、その後パリに滞在し、そこを拠点としながらロンドン、マドリード、エル・エスコリアル、トレドを見物
- ロンドン動物園 (1828-)

橋本関雪のホーム・ムービーより

動物園見物風景 ロンドンの動物園

橋本関雪のホーム・ムービーより

動物園見物風景 上野動物園

橋本関雪のホーム・ムービーより
動物園見物風景 京都市立動物園か？

近代動物園のはじまり

- オーストリアのシエンブルン動物園 (1765-)
- パリの国立自然史博物館の附属施設として始まったメナジェリー (動物飼育場) (1773-)
- 1828年に開園したロンドン動物園
- ドイツ、ハンブルグにあるハーゲンベック動物園 (1901-)
- 「無柵放養式」—動物の収容展示施設で、動物と観客の間にある檻や柵などの視覚的障害物をとりのぞき、その代わりに動物たちがとび越えられない堀 (水堀または空堀) を設けた形式

上野動物園

- 開園1882年
- 上野動物園がハーゲンベックと取引を始めるのは1902年
- 1923年の関東大震災を契機に、上野動物公園は上野公園とともに、宮内省の管轄から東京市へと「御下賜(ごかし)」
- 公園課長・井下清 (1884-1973) は1925年7月からおよそ一年間、公園施設視察のための欧米出張
- 上野動物園の近代空間の完成 -- 1938年までには「明治、大正期の動物舎は殆ど全て、作りかえられてしまうといった、徹底したものであった」
- 「無柵放養式」

橋本関雪

- 1883-1945
- 「同時代最高水準の収入を誇った」画家
- 「東の大観、西の関雪」と評されていた
- 60回以上にわたる中国旅行
- 当時の「支那」を日本画の中に多く残す

橋本関雪の動物画 『玄猿』(1933)



橋本関雪の動物画 『涼宵』(1938)



橋本関雪の動物画 『秋圃』(1939)



百獣の楽園



「絵画」と「動物園」

京都市動物園は、昭和26年(1951)に制定された博物館法に基づいて昭和30年に博物館相当施設として指定された「生きている」動物を展示している博物館であり、展示物には違いはあるものの [今回の展覧会は] 博物館同士の連携ともいえる。(中略) **そもそも動物園は美術と無縁ではなく、画家やその卵たちが写生に訪れる場所でもある。かつて、身近に存在しない動物は既に描かれていた絵を手本として描かれていたが、明治以降は、動物園が直接写生する場として利用されてきた。今も京都市動物園は、数多くの美術系の学生が写生に訪れる場である。**

坂本英房「百獣の樂園をめざして」『百獣の樂園——美術にすむ動物たち』
(京都国立博物館、2011年)5頁。

和辻哲郎

- 1889年–1960年
- 東京帝国大学文化大学哲学科卒
- 1925年 京都帝国大学の助教授
- 1927年 一年間ドイツ留学
- ハイデッガー『存在と時間』(1927)に出会う
- 「現存在/Da-sein」
- 時間性 → 空間性

和辻哲郎の『風土』

ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風として把握した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう。しかしそれを「自然」として問題とせず「風土」として考察しようとすることには相当の理由がある。

和辻哲郎「風土」『和辻哲郎全集 第八巻』（岩波書店、1989年）7頁。

三つの異なる風土現象地域

- 「東アジアの沿岸一帯」をモンスーン地帯
 - 「受容的・忍従的」といった気質
 - 「シナ」と「日本」といった国家単位によってもさらに細分化
- 「アラビア、アフリカ、蒙古等に存する極めて特殊な風土」を砂漠地帯
- 牧場地帯を「ヨーロッパの風土の特徴」

基本コンセプトとしての「志向的体験」

寒さを感じるとき、我々自身はすでに外気の寒冷のもとに宿っている。我々自身が寒さにかかわるということは、我々自身が寒さの中へ出ているということにほかならぬのである。かかる意味で我々自身の有り方は、ハイデッガーが力説するように、「外にでている」(ex-sistere)ことを、従って志向性を、特徴とする。

和辻哲郎「風土」『和辻哲郎全集 第八巻』(岩波書店、1989年)9頁。

- 「主観客観の区別、従ってそれ自身単独に存立する『我々』と『寒気』との区別は一つの誤解である」
- 「我々自身が寒さにかかわるということは、我々自身が寒さの中へ出ているということにほかならない」
- 「我々は寒さを感じずる。すなわち我々は寒さのうちへ出ている。だから寒さを感じずるということにおいて我々は寒さ自身のうちに自己を見いだすのである」

「志向的体験」という行動を、「間柄」という複数者の関係性に拡大化

寒さの中に出ているのは単に我れのみではなくして我々である。否、我々であるところの我れ、我れであるところの我々である。「外に出る」ことを根本的規定としているのはかかる我々であって単なる我れではない。従って「外に出る」という構造も、寒気というごとき「もの」の中にでるよりも先に、すでに他の我れの中に出るということにおいて存している。これは志向的關係ではなくして「間柄」である。だから寒さにおいて己を見いだすのは、根源的には間柄としての我々なのである。

和辻哲郎「風土」『和辻哲郎全集 第八巻』（岩波書店、1989年）10頁。

橋本関雪ホーム・ムービー
『朝鮮見物』(1929)

橋本関雪ホーム・ムービー 『朝鮮見物』(1929)

- 「マズ 釜山ニ上陸 コレヨリ 東萊ニ向フ。」
- 「東萊(トウライ)」
- 「蔚山(ウルサン)」
- 「掛陵(ケリュン)」
- 元聖(ウォンソン)王の陵墓
- 「文武石人」
- 「石窟庵」

和辻の言葉へ回帰

人間存在の存在論的把握はもはや単に時間性を構造とする「超越」によってのみは遂げられないのである。それはまず第一に他人において己れを見いだし、自他の合一において絶対的否定性に還り行く、という意味での超越でなくてはならぬ。従って人と人との「間柄」が超越の場面ではなくてはならぬ。すなわち自他を見いださしめる地盤としての間柄そのものが、本来すでに「外に出る」(ex-sistere)場面なのである。

和辻哲郎「風土」『和辻哲郎全集 第八巻』(岩波書店、1989年)18頁。